

## <前回・西欧近代とキリスト教>

### (1) キリスト教的伝統の歴史的理解

1. キリスト教的伝統の複合性：「ヘブライズム」(Hebraism)と「ヘレニズム」(Hellenism)の類型論(19世紀以来、マシュー・アーノルドの主張を通して普及)

近代における、ギリシャ的近代の伝統との差異化におけるユダヤ伝統の複合性あるいは緊張関係の自覚→類型論(「ルネサンスと宗教改革」)。

5. ハヤ・オントロギア：有賀鐵太郎

6. 近代啓蒙思想の意義＝歴史意識の成立

歴史主義の誕生 → 伝統の歴史的反省 → 伝統の多重性の発見

ヘレニズムとヘブライズムという

問題設定の誕生

### (2) いつから近代か

7. 時代区分としての「近代」：中世とポスト近代(あるいは現代)との対比における近代。そもそも「中世」という時代区分は、近代の側から古代と近代の間の時代として、基本的に否定的なニュアンスで使用された。

8. トレルチの場合：

・おおよそ17世紀までと18世紀以降において区切られた古プロテスタンティズムと新プロテスタンティズム。これは、啓蒙主義の以前と以降に対応する。

12. 次の世代に属するティリッヒ：トレルチの論じた啓蒙的近代の特徴を、トレルチ同様に、「数学的自然科学、技術、経済」の「三重の活動性」(dreifacche Tätigkeit)とその担い手としての「市民社会」(Tillich, 1926, 32-36)

ブルジョワ社会＝近代について、革命(17-18世紀)、勝利(19世紀)、崩壊・変容(20世紀)という三つの段階を区別(Tillich, 1945)。

ティリッヒの関心は、革命とその勝利の中から形成された18世紀以降の近代がどのように崩壊・変容し——啓蒙主義の成立とその内的な葛藤、そして諸伝統の総合の試みとその挫折——、また現代の錯綜した動向の中に、どのような新しい精神状況の萌芽を見いだしうるか、という点に向けられている。

14. パネンベルク：16世紀の宗教改革から18世紀の啓蒙的近代に至る歴史的過程の分析。

『ドイツにおける新しい福音主義神学の問題史』(Pannenberg, 1997)において、19世紀のドイツ・プロテスタント神学の問題状況を規定するものとして宗教改革後の宗教戦争の帰結、つまり教派的多元性の状況に注目。

15. トレルチからティリッヒ、そしてパネンベルクに至る100年にわたるキリスト教思想における近代論。

近代とは、諸伝統の緊張関係に規定されて展開した、中世からポスト近代へと至る動的プロセスであるが、それ自体の中にいくつかの決定的な変遷・段階的区分が認められる。つまり、近代とは単純な一様性において理解できるのではなく、諸伝統と諸領域(諸サブシステム)のゆるやかなネットワークとでも言うべき構造と動的プロセスとによって、捉えられねばならないのである。

### (3) 時代区分する研究者の視点

16. 時代区分は、単なる主観の問題ではないとしても、一義的な客観性によって規定できる問題ではない。歴史的展開過程の中に現れたどの要素に注目するのか、何を指標にして時代区分を行うのか、に関わる研究者の側の視点をぬきに、時代区分を論じることはでき

ない。つまり、時代区分する際に注目されるメルクマールの設定という問題である。

19. テオドール・ウォーカーの場合。黒人神学 (Black Theology) の立場。

大西洋を横断した近代奴隷制の成立こそが近代のメルクマール——「近代の歴史をそれ以前の歴史から区別する主要な出来事」——である。

Theodore Walker Jr., *Mothership Connections. A Black Atlantic Synthesis of Neoclassical Metaphysics and Black Theology*, State University of New York Press, 2004.

## 2. 19世紀キリスト教思想の遺産

### (1) 近代的知と近代聖書学

1. 自然主義：西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解、そして聖書研究も、この変動に規定されている。

啓蒙主義→実証主義的科学

村上陽一郎の聖俗革命 (『近代科学と聖俗革命』新曜社)

村上陽一郎の「聖俗革命」：「神—世界—人間」→「世界—人間」

2. 「近代科学」の自律化：一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念 (実証科学としての自然科学) の誕生。近代的知のモデル。

小林道夫：仮説→実験による検証・修正

3. 近接的な作用因による因果律と自然

→ 機械論的自然 cf. 錬金術的自然

日常的経験とのずれ (デカルト)

↓

超自然・奇跡の排除あるいは合理化

中才敏郎『ヒュームの人と思想 宗教と哲学の間で』和泉書院、2016年。

4. 近代聖書学においても超自然・奇跡の排除の傾向

5. 自然主義と歴史主義

近代的知の二つの動向 (因果律の二つのタイプ)

作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。

→ 自然科学／精神科学、説明／理解

6. 「近代」と人間的現実の歴史化 → 近代歴史学、歴史的視点

現実は無常不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。

7. 知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物 (歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される) である。cf. 自然法

↓

価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連関 (文脈) の範囲内に限定される。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。

相対性の意識=歴史相対主義 → ニヒリズム

8. 「自然主義は無制限に、あらゆる生活のものすごい自然主義化と荒涼化へと導き、歴史主義はあの相対主義的懐疑に導く」、「歴史的なものの認識可能性と意味とに対する相対主義的な価値的懐疑であり疑惑である。」(トレルチ『歴史主義とその諸問題 上中下』(トレルチ著作集4~6)、上165)

## (2) ドイツ思想の古典期：多様な伝統の総合の構想

- ・政治的宗教的な危機の時代：近代世界に適応したキリスト教の実験  
啓蒙主義的合理主義とキリスト教的伝統との総合。

正統主義／敬虔主義／啓蒙主義

合理主義／ロマン主義

### 1. 近代神学の父シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)

- ①近代プロテスタント神学の父：啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合  
同時に、近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。

- ②啓蒙思想とロマン主義の総合

カント・フィヒテ → ロマン主義運動 → 体系構想 (神学—哲学)

ヘルンフト兄弟団 1796 1811

ハレ大学神学部 (宗教的懐疑) ベルリン、ベルリン大学神学部

1787(19) 『宗教論』(Reden)・『モノローゲン』

- ③解釈学・弁証法・倫理学、体系家 → 信仰論(『信仰論』(Glaubenslehre))の影響  
Dogmatik から Glaubenslehre へ

・人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念(本質論から現象論へ)

・実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教への定位 cf. 理神論

高次の實在論、説教者

↓

体系的哲学構想(『弁証法』)に裏打ちされた宗教論、方法論としての解釈学の構築

### 2. 『宗教論』の信仰概念

『宗教論』(筑摩書房)：宗教を軽蔑する教養人

第一講 弁明 (宗教批判) 第二講 宗教の本質について (宗教本質論)

第三講 宗教へ導くための教育について

第四講 宗教における集団について、あるいは教会と聖職について

第五講 さまざまの宗教について (宗教的多元性)

### 3. 『信仰論』の意義：教義学の新しいスタイル、自由主義神学

・経験から教義へ

・近代的な諸学の体系内における神学の位置づけの明確化

倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ

↓

近代的学問としてのキリスト教神学の構想

### 4. 『信仰論』序説(Einleitung)

「§2 教義学は神学的学科であり、それゆえもつばらキリスト教会と関係しているのだから、それが何であるかを説明することが可能になるのは、キリスト教会の概念について了解されている場合に限られる。」(Schleiermacher, 1830, 10)

「§3 すべての教会共同体の基礎である敬虔さは、それだけで純粹に考察される場合、知や行為ではなく、感情の、あるいは直接的自己意識の規定された形態なのである。」

(ibid., 14)

「§4 敬虔さの表出はたとえどんなに多様であっても、敬虔さを他のすべての感情から区別することを可能にする敬虔さの諸表出すべてに共通なもの、つまり敬虔さの自己同一的

な本質は、次の点に存する。すなわち、それは、我々が自らを絶対的に依存的であると意識していること、あるいは同じことであるが、我々が自らを神との関係性において意識しているということである。」(ibid., 23)

#### <参考文献>

1. シュライエルマッハー『宗教論』岩波文庫、筑摩書房。  
F.D.E.シュライアマハー『キリスト教信仰』の弁証——『信仰論』に関するリュッケ宛ての二通の書簡』知泉書館、2015年。
2. ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』(『ティリッヒ著作集』別巻3)白水社。
3. 波多野精一『宗教哲学・宗教哲学序論』『時と永遠』岩波文庫。
4. 武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社。
5. 川島堅二『F・シュライアマハーにおける弁証法的思想の形成』本の風景社。
6. 伊藤慶郎『シュライアマハーの対話的思考と神認識——もうひとつの弁証法』晃洋書房、2013年。
7. ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち——パウロからカール・バルトまで』新教出版社、2014年。

#### (3) 理想主義＝観念論から実存へ

##### 1. ティリッヒ

「今日、実存哲学と呼ばれている特別な哲学の在り方は、ワイマール共和国下のドイツ思想の主流の一つとして現れた。その指導者にはハイデッガーやヤスパーズといった人が数えられる。しかし、その歴史は少なくとも一世紀、1840年代まで遡る。その主要な論争はシェリング、キルケゴールそしてマルクスといった思想家による、ヘーゲル学派の支配的なく合理主義>あるいは汎論理主義>への鋭い批判において定式化されたのであり、次の世代では、ニーチェとデイルタイがその提唱者に加わるのである」

(Tillich,1944, p.354)。

「広義の実存の哲学」(in a larger sense)：そのもっとも典型的な思想家であるキルケゴール(狭義の実存主義)から、後期シェリング、フォイエルバッハ、マルクス、ニーチェから、さらにはデイルタイ、ベルグソンなどの生の哲学やウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムまでを包括する。

##### 2. 19世紀のドイツ思想史におけるシェリングの位置：本質主義から実存主義へ

シェリングをカント以降のドイツ観念論の文脈に位置づけると共に、とくに後期シェリングの思想をヘーゲル的な本質主義に対する批判としての実存主義の起点と捉えている。

##### 3. 実存主義：人間の現実や実在を本質存在から区別された「実存」(現実存在) —この実存の内容をどう理解するのか、つまり実存の基本的メルクマールを何にするかについては様々な立場が存在する—として規定し、人間存在の生きた現実を合理的に把握可能な諸本質とそれらからなる論理学の体系とから演繹することはできないとする思想的立場。

本質主義：論理体系において合理的に演繹される諸本質から人間を理解する立場(ヘーゲルに典型的に見られる汎論理主義)。哲学思想に広く見られる主要な思想的動向。  
波多野ならば、合理主義。

##### 4. シェリング：本質主義(ヘーゲル)と実存哲学(後期シェリング→キルケゴール)の

関係 → シェリングの言う消極哲学と積極哲学の関係。

5. 「ヘーゲルの死後長い間、彼はヘーゲルの最大の批判者であった。……しかし、シェリングはヘーゲルと自らが行ったこと（同一哲学）を廃棄しなかった。彼は本質の哲学を保持した。これに対して、彼は実存の哲学を対置した。実存主義はそれ自身の足で立つことのできる哲学ではない。それは常に、現実の本質構造のヴィジョンに基づいている。……この意味でそれは本質主義に基づくのであり、それなしには生きられないのである。……シェリングの後期においては、実存主義に主要な強調点が置かれていた。しかしながら、本質主義は展開されなかったものの、その前提とされていたのである」(Tillich, 1962/63, 438)。

6. 前期の「同一哲学・消極哲学」から後期の「哲学的経験論・積極哲学」への変化（発展）と、両者の相補性。

7. 中期シェリング：『人間的自由の本質』

・「真の対立が、すなわち必然性と自由の対立」(岩波文庫、15)、「人間をその自由とともに神的存在者そのものの内に救い上げ、人間は神の外にあるのではなくして神の内にあるのであり、彼の働きそのものも神の生の一つとしてその生に属する」(26)

「自然哲学」「実存する限りの存在者(das Wesen, sofern es existiert)と単に実存の根底である限りにおける存在者(das Wesen, sofern es bloss Grunde von Existenz ist)との間の区別」(58)、「神はその実存の根底を自己自身のうちに有しておらねばならぬ」、「神の実存の根底」「神のうちなる自然」「重力」「暗い根底」(59)

「憧憬」「欲望」「予感する意志」(61)、「憧憬の言葉」「悟性」

「諸力の中心点として成立する生きた紐帯の方は霊魂である」(66)

↓

第一の原理：自然、暗い原理

第二の原理：発言された言葉、悟性、光の原理

第三の原理：霊魂、精神（両原理の生きた同一性）

・悪の可能性：両原理の分裂可能性。人間を神より分かち原理としての我性。「我性は光より分離することができる」(71)

・悪の現実性：「必然的な紐帯ではなくして自由な紐帯」「悪への促し」「誘惑」(87)

「激発」「自由、精神、我意」の「共働」(91)、「被造物の非合理的な或いは闇の原理の激発」「現動化された我性(aktivierte Selbstheit)」(92)。

8. 中期における三重のポテンツ論は積極哲学・後期においても反復される。

#### <参考文献>

0. 『シェリング著作集・全5巻』燈影舎。『人間的自由の本質』岩波文庫。

1. ティリッヒ

1944: *Existential Philosophy*, in: MW.1

1955: *Schelling und die Anfänge des existenzialistischen Protestes*, in: MW.1

1962/63: *Perspectives on 19th and 20th Century protestant Theology*, in: *A History of Christian Thought* (Ed. by Carl E. Braaten), Simon and Schuster 1972, pp.297-541

1963: *Systematic Theology vol.3*, The University of Chicago Press

2. 日本シェリング協会『シェリング年報』晃洋書房。

3. 橋本崇『偶然性と神話 後期シェリングの現実性の形而上学』東海大学出版会。
4. 諸岡道比古『人間における悪 カントシェリングをめぐって』東北大学出版会。
5. 松山寿一・加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』晃洋書房。
6. 松山寿一『人間と悪 処女作『悪の起源論』を読む』年、『人間と自然 シェリング 自然哲学を理解するために』、『知と無知 ヘーゲル、シェリング、西田』萌書房。
7. 平尾昌宏『哲学するための哲学入門 シェリング『自由論』を読む』萌書房。
8. H. J. ザントキューラー『シェリング哲学 入門と研究の手引き』昭和堂。

#### (4) 観念論の破綻と実存主義の徹底

近代批判としての実存主義

##### 1. キルケゴール (1813-1855)

###### ①宗教批判者としてのキルケゴール

真のキリスト教と、近代市民社会において墮落したキリスト教

→ バルト (啓示と宗教との区別)

###### ②反ヘーゲル主義 → 実存主義の先駆者

真理：客観性としての真理／主体性としての真理

体系：論理学の体系は可能である (諸イデアの相互関係) / しかし、歴史的な現実存在 (=実存) に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である

同時代性と同時性：信仰はキリストと信仰者とが同時性に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。

ベルリン大学で後期シェリングの講義を聴講。

###### ③仮名と実名の二種類の著作 → 思想の表現形式、レトリックに注目

仮名の意味：1. 小説あるいはフィクション性→著作自体に注意を集中 (詩的機能)

2. 一人の思想家の思想が、複数の仮名へと分散する。思想の断片性

「私自身は、ヨハネス・クリマクスよりは高いところにいるが、アンティ・クリマクスよりは低い地点にいる」、『死に至る病』副題：教化と覚醒を目的とする (=建德的)

ヨハネス・クリマクス『哲学的断片』『非学問的後書き』

アンチ・クリマクス『死に至る病』『キリスト教の修練』

##### 2. キルケゴールの宗教批判=現代批判と市民社会のキリスト教

###### ①「コルサール事件」(1846年)、週刊新聞『コルサール』(ゴシップ暴露)

###### ②キルケゴールの現代批判 (『文学評論』の第2章)

- ・革命の時代と分別の時代 (反省の時代、情熱のない時代)

水平化と外面性 → 新聞などのマスコミと世論・公衆といったもの

- ・宗教的信仰：個々人の救いの問題、個人ひとりひとりの事柄

宗教者にとってきびしい試練、修養 → 「良き戦い」として人生

- ・沈黙、無関心を装った教会 → 非人間的大衆化社会を批判し真のキリスト教を守るべき使命をもつ教会 (戦

闘の教会、ecclesia militans)

という任務の放棄

##### 3. 単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、一かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、

神の前にただひとりで立つことである」 → 単独者 → ルターの信仰

4. 不安(『不安の概念』岩波文庫、1844)

5. 絶望(『死に至る病』岩波文庫、1849)

6. 「本質／不安」から「実存／絶望」へ：墮罪＝飛躍

7. 人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在

・自己反省、自己参照性、自己関係：「……「自己」に関する関係」に関する関係」……」 → 無限に多重化する存在者である(生成過程における自己)

・自己＝生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者 → 本来的な自己になるという課題

・関係存在としての自己の存在根拠

1. 人間は自己自身の中にその存在根拠を有する → 自己組織化

始まりの問題(宇宙の始まりのその前)と無限遡及のパラドックス

2. 関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場

・人間＝自己関係的存在→自己になる課題→不安と絶望の可能性

8. 実存弁証法と真のキリスト者への道

・精神の発展プロセス：

「美的段階 → 倫理的段階 → 宗教性A → 宗教性B」

[美的段階]：美的なものが人生の原理あるいは目的になっている生き方

[倫理的段階]：倫理的なものが原理または目的とする生き方

・「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」(マタイ 26:41)。

[宗教性A]：「わたしは特定の宗教は信じないが、神や霊の存在は信じる」

[宗教性B]：同時性あるいは絶対的逆説性

(キリストにおける罪の贖罪を信じる)

### <参考文献>

0. 『キルケゴール著作集』白水社。

『キルケゴール著作全集(原典訳記念版・全15巻)』創言社。

1. キルケゴール『不安の概念』『死に至る病』岩波文庫。

2. 武藤一雄『キルケゴール』創文社。

3. 小川圭治『キルケゴール』講談社。

4. ディーム『キルケゴールの実存弁証法』創言社。

5. マッキノン他『キルケゴール—新しい解釈の試み—』昭和堂。

6. 稲村秀一『キルケゴールの人間学』番紅花舎。

7. 日本キルケゴール研究センター刊行、松木真一編『キルケゴールとキリスト教神学の展望——<人間が壊れる>時代の中で』創言社。

8. 須藤孝也『キルケゴールと「キリスト教界」』関西学院大学出版会。

9. 橋本淳『セーレン・キルケゴール 北ツェランの旅——「真理とは何か」』創元社。